HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教員養成段階における往還型へき地教育プログラムの研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	川前, あゆみ
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11560号
Issue Date	2014-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57131
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ayumi_Kawamae_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　　氏名　川　前　あゆみ

学位論文名
教員養成段階における往還型へき地教育プログラムの研究

1.　本論文の課題

本論文では、理論と実践の往還型の教師教育プログラムを評価しつつも、それだけではへき地の教師教育には不十分であることを指摘した。何故なら、日本の往還型教師教育プログラムによる改善が進行する中でも、へき地小規模校の教員の定着率や指導力が向上したわけではない。へき地の教師教育には、へき地教育への理解や志向性の向上と、複式授業・少人数学級経営・地域連携教育など、独自の指導方法の会得が不可欠だからである。

このような問題意識を元に、本論文では、教員養成段階における往還型へき地教育プログラムの必要性とその教育効果を質的分析によってとらえた。北海道で、新卒・若手教員がへき地校に配属される傾向が強い現実からすれば、へき地教育の担い手育成は、現職教員研修だけでなく、学部教員養成段階でのへき地教育プログラムが必要となる。

2.　本論文の事例研究選定の意義と分析方法

本論文の研究対象は、筆者が所属する北海道教育大学釧路校であるが、質的分析では対象の中に入り込むことが必要になる。また教育実践分析は、意識と行動が必ずしも一致しないために、量的分析だけでは実践力をとらえることができず、細部の質的分析が不可欠である。

本論文の対象である北海道教育大学釧路校は、全国の大学の中でも、体系的先進的に往還型へき地教育プログラムを進めている。本論文では、往還型へき地教育プログラムがへき地に適応した教育実践力の育成と、へき地のプラス意識形成に資する教育効果を、質的調査を中心にして明らかにした。

3.　へき地教育プログラム分析の構造と各部・各章の要点

本論文ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ部に分けて分析した。3 つの分析対象は、へき地教育プログラムが必要となるⅠ「若手教師の現状」および、学生の大きな成長が見られる画期としてのⅡ「初年次課題意識形成期」とⅢ「実践力発展期」であり、それを各部で分析した。

第Ⅰ部「へき地における新卒・若手教師の現状と往還型へき地教育プログラム」では、へき地小規模校で新卒・若手教師が多いという現状を踏まえて、学部教員養成段階での往還型へき地教育プログラムの必要性を明らかにした。

第 1 章「へき地小規模校を取り巻く現状と新卒・若手教師育成の課題」では、新卒教師がへき地で困難を抱える現状を分析し、新卒教師が一定のへき地の理解と技能を有すれば、へき地の定着率も向上する可能性をとらえた。第 2 章「へき地教育プログラムの体系化と[理論と実践]の往還構造」では、往還型の教師教育を前提にしながら、さらにへき地教育においても、短期から長期へ、基本から応用実践へ移行できる往還型へき地教育プログラムの構造をとらえた。

第Ⅱ部「初年次教育におけるへき地教育の理論と実践の往還型学修活動の特徴と教育効果」では、へき地の教員養成のためには、初年次教育におけるへき地教育の理論と実践の往還型学修活動が教育効果を高めていることを明らかにした。

第 3 章「初年次におけるへき地教育の理論学習と問題意識の形成」では、へき地の理論講義において、まずへき地のマイナス面をプラスにとらえるパラダイム転換を行うことが、へき地特性を多面的にとらえ、プラスに生かす動機づけとなったことを明らかにした。第 4 章「初年次におけるへき地教育の実地研修と実践意識の形成」では、初年次の現実的な認識を高める上で、へき地校の現地訪問研修が有効であることを明らかにした。第 5 章 「初年次におけるへき地教育の研修課題と学び続ける教師の意識形成」では、初年次からの、へき地の研修継続の

動機づけと研修方法の会得が重要であることを明らかにした。これら初年次のへき地の講義やへき地校訪問研修は、全員が取得するプログラムであるため、量的把握も重要で、大部分の学生がパラダイムの転換を果たしていることを明らかにした。

第Ⅲ部「実践力発展期におけるへき地教育実践力育成の学修活動の特徴と教育効果」では、実践力発展期におけるへき地教育実習やへき地実習事前指導等が往還的に発展したへき地教育プログラムとその学修活動が、へき地教育の実践力をさらに向上させていることを明らかにした。へき地教育実習は、主免教育実習経験後の実習でもあり、より細分化した実践力の連続的な発展の分析が必要で、プロセス・レコードを含めた質的な把握が重要になる。

第 6 章「実践力発展期におけるへき地教育実習と専門的実践力の育成」では、へき地教育実習でのプロセス・レコード分析によって、へき地教育実習生が、細部にわたる小規模校教育の指導方法や地域連携の方法などを会得してへき地教育の実践力を高めたことを明らかにした。このへき地教育の実践力の向上が、へき地教育の担い手としての自信やへき地への赴任を積極的に受け入れる意識を形成したことを明らかにした。第 7 章「実践力発展期におけるへき地教育プログラムの総括的評価とへき地意識の転換」では、へき地教育実習を終えた後に、へき地教育プログラムの総括的評価をとらえると、初年次課題意識形成期から実践力発展期までの各へき地教育プログラムの構成要素が、年次発展的に結びついていること、さらに講義と実地研修の認識が結びつきながら、へき地に対するパラダイム転換が図られていることを明らかにした。第 8 章「実践力発展期におけるへき地教育プログラムのナラティブ評価とへき地意識の転換」では、新卒赴任者のナラティブな評価でも、新入生研修からへき地教育実習までのへき地教育プログラムが連動したことを明らかにした。

このようにへき地教育プログラムの教育効果を、意識調査等で量的に測るだけでなく、個々の学生のプロセス・レコード分析やナラティブな意識調査分析を質的にとらえた。これにより 1 年次から 3 年次後期以降のへき地教育プログラムの各構成要素が、連続的に関連しながら、へき地教育の評価をプラスに変える影響を与えたことを明らかにした。

4. 結論-往還型へき地教育プログラムの役割と可能性

以上の各部の分析を通じて、最終的に以下の点を明らかにした。

第 1 に、へき地教育の担い手育成にとっては、日本の教師教育研究の到達点としての、理論と実践の往還だけでは不十分であり、へき地教育の独自の往還型へき地教育プログラムが必要だということを明らかにした。第 2 に、学部教員養成段階ではとりわけ、初年次課題意識形成期と実践力発展期の 2 つが重要な成長期であり、それぞれの段階でへき地に根ざす意識と実践力が形成されていることを明らかにした。第 3 に、初年次教育におけるパラダイム転換の指導方法も導入することで、へき地教育のマイナスイメージのプラスイメージへの転換が図られていることを明らかにした。このプラスイメージがまずへき地教育の開発に前向きに取り組む前提となることを明らかにした。第 4 に、実践力発展期における、プロセス・レコード分析・ナラティブ分析・総括的な意識分析においても、初年次から連続的・継続的・往還的にへき地教育への理解とへき地教育実践力が発展していることを明らかにした。

以上のように、初年次教育から実践力発展期まで、段階的に理論（講義・事前指導）と実践（研修・実習）の往還型プログラムを積み上げていく中で、新卒赴任前の学部段階におけるへき地教育への理解と実践的指導力が形成され、これによりへき地の赴任・定着につながる意識が向上したことを明らかにした。